



IUFRO-J NEWS

— No. 32 (1987.12) —

Div. 1, P 1.07-00 「山岳林への人為の影響と管理」 研究集会開催報告

実行委員長・林試 藤 森 隆 郎

IUFRO 亜高山帯の生態研究プロジェクト (P 1.07-00) の第4回研究集会が日本で1987年9月5日から13日まで開催された。富士山麓の静岡県裾野市で研究発表等会議を行った後、長野県の八ヶ岳、志賀高原で現地検討会を行った。

1. 大会の性格と経緯

このプロジェクトの主旨は、厳しい自然環境下にある亜高山帯の森林の保全のためにその生態的研究を国際的に討議しようというものである。

第1回の大会は1980年にニュージーランドで行われ、以後アメリカのオレゴン州、スイス、そして今回の日本と2年または3年置きに開催するという非常に活動の盛んなプロジェクトである。一方各大会への参加者は40人前後というこじんまりとしたものであるが、そのことの利点を大切にしようというプロジェクトでもある。

1981年に日本に対して開催の打診があり、3年前のスイス大会で日本開催が決定された。都立大学の木村允教授、静岡大学の増沢武弘助教授らは第2回大会から連続参加しており、日本ともなじみ深いものである。

2. 組織

国際組織委員 (IUFRO 委員) 会は、R.H. Waring (アメリカ)、H. Truner (スイス)、藤森隆郎 (日本) で構成され、日本の組織兼実行委員会は次の構成であった。

委員長：藤森隆郎 (林試)、国内委員長：木村 允 (都立大)、事務局長：新田隆三 (林試)、事務局：増沢武弘 (静岡大)、井上敬雄、大角泰夫、高橋邦秀、後藤

義明、千葉幸弘 (以上林試)。

本大会の開催には、国立林業試験場、日本林学会、日本生態学会、日本雪氷学会の後援を得た。

3. 参加者

10ヶ国から49人が参加した。外国は西ドイツ、オーストリー、スイス、フランス、アメリカ、カナダ、ニュージーランド、中国、韓国で、16名であった。中国、韓国の参加は初めてであり、興味深い情報を提供してくれ、アジアでの開催の特徴が強められた。

4. 研究発表

2日半にわたって口頭発表27件、ポスターセッション9件があった。口頭発表は4つのテーマに分けてなされた。第1テーマは「人為の影響による森林の衰退」で、6件の発表があった。西ドイツのホルトマイヤー氏の発表にみられるように、亜高山帯上部までの放牧の続いた場所では、放牧が中止されても森林限界は本来のものより数100メートル低いままであるという。またそのことが雪崩を増大させ、山村に深刻な問題を与えているという。生活の場が亜高山帯と密着したヨーロッパアルプスでは亜高山帯林の保全は極めて重要である。

中国の四川省の亜高山帯林は過去30年ほどの間に急激な過伐が加わり、洪水、山地崩壊が増大し、亜高山帯林の保全の重要性が強調されている。

第2テーマは「樹木の生態生理、ストレス要因と樹木の生長」で7件の発表があった。ここでは例えばアメリカのソウエル氏の「亜高山帯針葉樹林の水分吸収に及ぼす土壌の低温の影響」のように、亜高山帯の低温や強風



など厳しい環境下での樹木の生長や、その阻害のメカニズムなどが発表された。

また大気汚染の影響についての発表が2件あり、アメリカやヨーロッパの実態が紹介された。アメリカのウエリング氏はチッ素に対する針葉樹の反応は広葉樹のそれと異なり、樹体内での過剰チッ素に伴う生理的異常が針葉樹の衰退の原因の一つであることを強調した。

第3テーマは「雪崩、山地崩壊と森林管理」で7件の発表があった。スイスのフレイ氏は亜高山帯の森林の衰退による森林の疎開が雪崩を引き起こすことを報告し、亜高山帯の森林を健全な状態に保つことの重要性を強調した。またスイスのシェーネンベルガー氏は亜高山帯の森林の回復のために推奨されるべき造林方法を提示した。

第4テーマは「アジア東部の山岳林の構造、動態と更新」で7件の発表があった。只木良也氏が、「日本の亜高山帯林の構造と生産力」の発表を通して日本の亜高山帯林の概要を紹介し、石塚森吉、神崎護、浅井達弘氏らが植生動態や更新過程などを発表した。

中国の徐鳳翔氏は中国チベットのボミ森林帯の高喬積トウヒ林を紹介したが、最高樹高70m、ha当たり幹材積が2500~3500m³に達するトウヒ林の存在は新しい情報であり、その成立環境に興味を持たれた。

全体の発表を通して亜高山帯の生態の環境測定は厳しい気象条件下で行わねばならないことに方法論的制約の大きいことが感じられた。特に生態生理的研究ではそうであるが、ヨーロッパは亜高山帯が牧畜、あるいは一部農業等の生活の場であることもあり、現地施設を設置しての情報解析は進んでいる。その他方法論についての質議が活発になされた。

5. エクスカーション

富士山、縮枯山からみどり池にかけてのハケ岳、志賀高原の亜高山帯林で現地検討を行った。富士山では増沢武弘氏の試験地などを見学、富士山の地質等について安間荘氏から説明を受けた。縮枯山では木村允氏、みどり池では谷本丈夫氏、志賀高原では渡辺隆一・林一六両氏の説明を受けた。

外国参加者が日本の亜高山帯林より受けた共通の印象は林内の更新稚幼樹が密に成立していることであった。その原因の一つは日本が多雨であることによる。また日本の亜高山帯の破壊が少ないことも印象的であったようである。日本の亜高山帯が生産林業の対象として手のつけられたのが戦後の一時期に限られたことが幸いしている。

6. 今後の活動

本大会のプロシーディングスは今年の12月末までに印刷される予定である。これまでの大会のプロシーディングスに目を通せば、世界の亜高山帯の森林に関する研究情報および世界各地の亜高山帯の森林の実態がよくわかり、これらは貴重な資料である。

次期大会は1989年9月に中国四川省で開催されることに決った。開催責任者は中国林業科学院の蔣有緒教授である。さらにその次の候補地としてはスウェーデン、オーストラリア、チリーが推薦された。

謝 辞

今回の開催に当っては各方面の方々から多大の御協力を得た。研究発表会場の静岡県農地森林部、裾野市役所、静岡県山林協会、および裾野市民の方々、エクスカーションの説明に御協力いただいた建設基礎調査設計事務所の安間荘氏、埼玉県林業試験場の崎尾均氏、静岡大学農学部村井宏氏、信州大学教育学部の渡辺隆一氏、筑波大学の林一六氏、そして事務局の置かれた国立林業試験場の多数の方々、各方面で御協力いただいた多数の大学の方々に心から御礼申し上げる。

プロシーディングスの申し込み

今大会のプロシーディングク(1部7,000円)購入御希望の方は下記へお申し込み下さい。

〒305 茨城県稲敷郡基崎町松ノ里
農林水産省林業試験場防災科内
ユフロ亜高山研究集会事務局

(Tel. 0298-73-3211, 内線 448 新田, 451 後藤)

第3, 第4 部会合同研究集会「ヒマラヤ地域の社会経済的 諸問題を解決するための林学の役割」に参加して

林業試験場 岡 裕 泰

シンポジウム

1987年10月17日～21日までベシワルのパキスタン森林研究所(PFI)において、上記のテーマの下で、ユフロの第3部会と第4部会の合同シンポジウムが開催された。公式参加者はパキスタン人36名、外国人42名(内13名は現在パキスタン国内で国際協力プロジェクトに従事)であった。このシンポジウムおよびエクスカージョンは、Deutsche Gesellschaft für Technische Zusammenarbeit (GTZ), FAO, Forest Engineering Research Institute of Canada (FERIC), およびILOの後援によって行なわれた。

シンポジウムはヒマラヤ森林地域における社会経済的諸問題、伐採・収穫・輸送、林業労働者と人間工学の3つのセッションに分かれて行なわれた。

第一の課題については、パキスタン北部の事例など11の論文が発表された。その中でしばしば、林野局と地域社会との間に現在よくみられる対立関係を改善する必要性が指摘された。ここでは特に最後にまとめられた提言のうち最も重要だと思われるものを以下に紹介する。それは森林開発プログラムは、もっと村を中心に、住民本位に計画されるべきだということである。造林事業への住民参加の重要性は既に10年来言われつづけていることであるが、特に今回この部門の副座長を務めたネパール・オーストラリア林業プロジェクトのGilmour氏が提案したのは、政府側が住民のニーズを憶測に基づいて判断し、それを造林事業に住民を巻き込むために利用するというのではなく、計画の立案、決定、実行、評価に村人が参加する新しい方式であった。彼らの考え方は同時に、森林資源調査に基づく森林計画から、住民による各種森林資源利用の伝統的実績を調査し、それを最大限尊重する森林計画への転換を主張するものであった。

第二の山岳林における伐出の問題についてはヒマラヤ地域以外に、カナダ、フィリピン、タンザニア、アメリカ、西ドイツなどの事例を含め14の論文が発表された。林道に関する論文が最も多く、林道の建設による環境へのマイナスの影響をいかにして抑えるかや、林道の建設による山村社会への影響、コンピュータを利用した効率的な林道設計の方法などが論じられた。他には発展途上

国の地域の社会的な条件や、自然条件に適合した「適正技術」の問題を論じた論文が目立った。ヒマラヤ地域の地形的条件からケーブル集材の有効性が指摘された外には、一般的に高価な機械を用いた資本集約的な技術よりも、地域の雇用問題に配慮し、豊富な安い労働力を生かす労働集約的技術がこの地域に適合的であることが確認された。

第三の林業労働者と人間工学の課題ではパキスタンおよびインドの事例を中心に9つの論文が発表された。パキスタンにおいては、請負制の下で林業労働者が極めて過酷な労働条件下におかれていることが指摘された。しかし一方、州有林の直備労働力によって伐出が行なわれた現場ではかなりの木材が伐採後林内に長期間放置されて腐っているという事実もあり、伝統的な請負労働の改善方向としては労働者が協同組合を組織し、組合を通して請負契約をするなどした方がよりましたという意見が出された。ほかに作業能率の改善については、専門家による訓練の前と後に労働者の作業能率を計測した結果、著しい能率の改善がみられた事例に基づき、新しい機械の開発よりも労働者の訓練をもっと重視すべきだとの指摘がされた。

全体に論文はヒマラヤ地域の中でもパキスタン北部に関するものが大多数を占めていた。特にNorth-West Frontier Province (NWFP)でのスイスおよびドイツとパキスタンとの協力プロジェクトにおける研究成果として発表された論文が目立った。

エクスカージョン

エクスカージョンは3コースに分かれて行なわれたが筆者はこのうちスイス人とドイツ人のプロジェクトの見学を中心にしたコースに参加した。このコースには外国人ばかり20名が参加した。

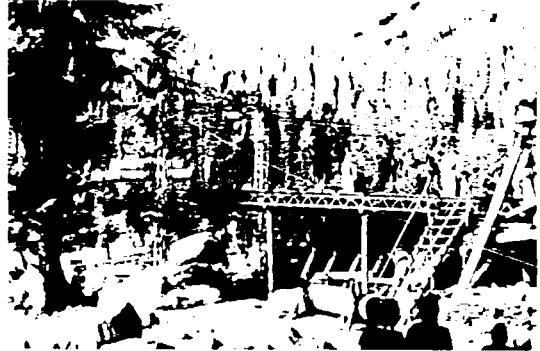
我々はまずNWFPのスワット地方最奥の山村カラムにおけるカラム農林業総合開発プロジェクト(KIDP)を見学に向かった。カラムは標高2000m余り、背後に6000m級の山々が連なる美しい村でパキスタンのスイスと呼ばれていた。村に至る道路が整備されるのにとともに近い将来観光開発が進むことが予想されるが、現在は、ヒマラヤスギの生産を主とする林業と、ジャガイモをはじめリンゴ、クルミ、トウモロコシ、エンジン、カ



NWFP の荒廃した山地では、家畜を養うのに十分な草の生産力もなくなったあと、土地所有者たちは国連の World Food Program などの援助を受け入れ、山の裾の方から Chir Pine などの植林をはじめた。

リフラワーなどを産する農業が村の中心産業である。カラムを含めスワット地方の人々はパキスタン政府に対して反抗的な態度を示す一方、地域としてのまとまりは強く、カラムにも村の長老を中心としたジルカと呼ばれる会議をはじめ、立派な自治機構があるという話だった。現地ではまず村側のプロジェクトのリーダーたちからプロジェクトに関する説明を聞き、その後一日目は農業関係、二日目は林業関係のプロジェクトを見学した。スイス人たちが協力して行っているのは林業関係では経営計画の立案、林業労働者の訓練等による技術の普及、ケーブルを利用した集材、林道建設、家畜の侵入を排除してのヒマラヤスギの更新試験などであった。

スイス人たちは村側と対話しながらプロジェクトを進めていたが、村人たちはいやなことははっきりと拒否するので、例えば村の一角に保存されている大きな平地林を試験地として使わせてもらいたいと思っても、村人たちが大切に守ってきたものなのでどうしても使わせてもらえないということだった。国家による支配が貫徹していない地域であるための必然的な結果とはいえ、政府との協力プロジェクトというよりも村を相手にして、一つ一つの事業を村の組織と相談しながら進めているというのが新鮮な感じがした。



スイスの協力プロジェクト、K.I.D.P. における集材の現場。

カラムでの見学を終えると翌日はスワットの谷を下り、さらにインダスの本流に沿って下ったのち、カガン谷をさかのぼってシンキアリにあるバ独林業プロジェクトの試験地に夕刻到着した。翌日、亜熱帯性の Chir Pine の天然更新の試験地や、林道の試験などを見たのち更に北のショグランに向かった。

ショグランの周辺ではバ独カガン集約的林業経営プロジェクトが NWFP の州有林で行なわれていた。我々は主としてヒマラヤスギの天然更新地および人工造林地、林道建設、伐出作業などを2日間にわたって見学した。

西ドイツの協力プロジェクトのやり方は、モデル的なやり方を示しながら、州有林全体の経営に対してアドバイスをすることをねらったもので、そのために造林や林道、機械などの試験を行ないながら、現地の自然的条件や州有林の予算、社会経済的条件を考慮して、州有林全体において実行可能な適切な施業方法と技術とを見つけだそうとしていた。これはもちろん現地に適合した技術をみだすことのできる柔軟で技術と地域社会を熟知した人材があってこそ可能なことであるが、合理的な技術協力のやり方だと思われた。

我々のエクスカージョンの中心だったカラムとカガンはパキスタン国内でも最もよく森林が残っている地域で、全国的にみればこれらの良好な森林の経営とは別に、荒廃地の造林が極めて重要な課題だといえる。

研究集会などのお知らせ

Div. 1, S1.02 立地サブジェクトグループの活動

◎ S1.02-09 造林地の生産力維持ワーキングパーティーのリーダー Chris Schutz (南アフリカ) からの Newsletter によってカナダ・ブリティッシュコロンビア大学の Hamish Kimmins 教授を中心にした Workshop "Predicting the Consequences of Intensive Harvesting on Site Productivity by Site Classification" の活動が紹介されている。

この Workshop の第1回は1985年にニュージーランド・ロトアルで開かれ、集約バイオマス収穫が生産力に及ぼす長期的影響をどのように予測するかについての全体的な問題が検討された。1986年にスウェーデン・イェドロスで開かれた第2回の Workshop では、この問題を扱う際のコンピュータモデルの役割が検討された。第3回の会合は1987年10月に米国サウスカロライナ州ジョージタウンで開かれ、集約施業に対する立地の反応を予測する手段として立地区分がどのように使用

されるかについての問題を検討した。次回の会合は1988年7月にカナダ・ブリティッシュコロンビア大学で "Integrating long-term changes in atmospheric chemistry and climate into yield prediction" をテーマに開かれる予定である。

◎ "Forest Growth: Process Modeling of Responses to Environmental Stress" をテーマにした国際会議が1988年4月19~22日、米国アラバマ州ガルフショアズで開かれる。この会合は環境ストレスに対する林分レベルの成長の反応について理解を深める手段としてのプロセスモデリングの可能性と限界を検討することに力点がおかれている。詳細は下記に問合せられたい。

Dr. John J. Blake Conference Chairman School of Forestry 108 White Smith Hall Auburn University AL 36849-5418 U.S.A.

(国立林試・有光一登)

Div. 4 の 近 況

— 大会講演集の申込み先 —

今年開かれた第四部会の研究集会は次の6つで日本からも数名が参加しました。大会講演集の申込み先をお知らせしますので早めに入手して下さい。多くの場合は無料です。

(1) Land and Resource Evaluation for National Planning in the Tropics: 1987. 1. 25~31 チェツマル、メキシコ 参加者 200名、25ヶ国

講演集申込先: Gyde Lund, USDA Forest Service P.O. Box 96090, Washington, DC 20090-6090 USA

(2) Workshop on Forest Decline and Reproduction: Regional and Global Consequences: 1987. 3. 22~28 クラコフ、ポーランド 参加者 100名。

申込み先: Olivia Volker, IIASA, A-2361 Laxenburg, Austria US \$ 25

(3) Forest Growth Modelling and Prediction Conference 1987. 8. 23~27 ミネアポリス、アメリカ 参加者 300名、19ヶ国

申込み先: Alan R. Ek, College of Forestry, University of Minnesota, St Paul, MN 55108 USA (印刷中)

(4) The Problem of Further Development of Stand Inventories 1987. 9. 7~10 ケスレイ、ハンガリー

申込み先: Geza Gaspar-Hantos, Orszagos erdeszeti egyesulet, Anker kos 1, H-1061 Budapest VI., Hungary

(5) Forest Sector and Trade Models: Theory and Applications 1987. 11. 3~4 シアトル、アメリカ

申込み先: CINTROFOR, University of Washington, College of Forest Resources AR-10, Seattle Washington 98195, USA

(6) Production Possibilities of the Forests, Their Optimal Utilization and Management of Forest Enterprises 1987. 9. 1~3 ツボレン、チェッコ

申込み先: Ing. I. Kolenka, the University of Forestry and Wood Technology, Zvolen, CSSR

来年に開かれる研究集会は次の6つですが申込み期限がせまっているので参加希望の方は至急申込みをして下さい。宛先は本平まで照会下さい。

- (1) Forest Growth: Process Modeling of Responses to Environmental Stress. 1988. 4. 19 ~22 アラバマ, アメリカ
 (2) Variable Probability Sampling 1988. 5. 16 ~21 キャンベラ, オーストラリア
 (3) Growth and Yield in Tropical Mixed Moist Forests 1988. 6. 20~24 クアラルンプール, マレーシア
 (4) Satellite Imagery for Forest Inventories:

- Methods, Experiences, Perspectives 1988. 8. or 9 月 ヘルシンキ, フィンランド
 (5) Economic Assessment of the Damage Caused to Forest Stands by Air Pollutants 1988. 9. 16~18 オーストリア
 (6) The International Forested Wetlands Resource: Identification and Inventory 1988. 9. 18 ~22 ルイジアナ, アメリカ

(信州大学・木平勇吉)

IUFRO 分科会専門部会 S 5.04-08 の案内

研究者の皆様へ:

来る 1988 年 5 月 15 日から 20 日までにブラジルで「木材加工の新技術」というテーマで我々の分科会の専門部会を開催することをこの 6 月 9 日にお知らせしました。本日もう二つテーマを加え、従ってこの専門部会は以下のテーマで行われます。

広葉樹の製材と機械加工

針葉樹の製材と機械加工

木材加工の新技術

この専門部会での発表をお願い致します。もし御発表

されるおつもりならば、どうかその題名と内容の短い要約を 1987 年 12 月 31 日までにお知らせください。1988 年 1 月にこの会議のプログラムをまとめるつもりです。専門部会での発表は、申込の数によりますが、多分 15 分になるでしょう。

宜しくお願ひしますとともにブラジルでお会いすることを楽しみにしております。 敬具

ユフロ ワーキングパーティ

S 5.04-08 機械加工分科会

議長 京都大学・野口昌巳

Div. 5 全体会議

「林産研究——その経済および社会の発展のための高度利用」

来る 1988 年 5 月 15 日から 20 日にブラジルのサンパウロで開かれる国際林業研究機関連合第 5 部会全体会議に参加されることを希望します。

会議のテーマは「林産研究——その経済および社会の発展のための高度利用」で特にラテンアメリカを重視しています。どうか林産工学の基礎的な領域や社会の発展と密接な関連を持つ分野での全ての発表や討議に参加して下さい。

IUFRO 会長 Dr. Robert Buckman (アメリカ)

IUFRO 副会長 Dr. Salleh Mohd Nor (マレーシア)

Div. 4 コーディネーター Dr. Robert L. Youngs (アメリカ)

Div. 5 副コーディネーター Prof. Horst Schulz (ドイツ)

Div. 5 副コーディネーター Dr. A.R. de Freitas (ブラジル)

Div. 5 副コーディネーター Dr. F.O. Tesoro

(フィリピン)

会議スケジュール (案)

5 月 15 日 (H)

終 日: 参加登録

昼 : IUFRO 役員昼食会

夜 : 歓迎会

5 月 16 日 (月)

午 前: 総会の開会

歓迎の辞「IUFRO と林学研究の進歩」

IUFRO 会長, Dr. Robert Buckman 基調講演「経済および社会の発展のための高度利用」

午 後: 特別講演「ラテンアメリカにおける林産学研究——現状と展望」

メキシコ R. Echenique Manrique

分科会 I ——ラテンアメリカに関する概説と

焦点

- A—「ラテンアメリカの木材資源の品質変化」
 B—「木材の有効利用のための加工」
 C—「エネルギーと化成品のための木材」

5月17日(火)

午 前：特別講演「研究のポテンシャル—そのポテンシャルを利用する鍵」

アメリカ R.L. Youngs

分科会II

- A—「熱帯地域に植林された早成樹の性質と利用」
 B—「熱帯における信頼性のある木材保存」
 C—「良質材のための木材乾燥」
 D—「バイオマス化成品—ラテンアメリカの経験」

午 後：地元の研究機関訪問/オプションツアー

夜：学会講義、国際木材学会

5月18日(水)

午 前：特別講演「構造部材に有効利用するための木材工学」

カナダ B. Madsen

分科会III

- A—「木材構造に影響する因子」
 B—「木材工学研究における進歩と計画」
 C—「熱帯材の製材と機械加工」
 D—「燃料としての木材—持たざる者のエネルギー危機」

午 後：ポスターセッション

分科会III

- A—「森林や構造物における木材の火に対する性能」
 B—「熱帯の国における木材の耐久性と保存性」
 C—「開発経済における複合木材と木材接着」
 D—「熱帯材の樹齢と成長量の測定」

夜：ミーティング

国際木材解剖学協会

国際開発局の代表者

5月19日(木)

午 前：特別講演「ラテンアメリカの木材資源を高度に利用するための林産工学の開発と適用」

午 後：ポスターセッション

総会(続き)

グループ・パーティーの運営会議

夜：歓迎と懇親の会

5月20日(金)

午 前：第5分科会運営会議

会議の概要と勧告

閉会の辞

昼：散会

会議場

会議は Maksoud Plaza Hotel, Alameda Campinas 150, 01404 São Paulo を本拠地として行われます。一連の部屋が参加者と同伴者用に予約されています。部屋料は朝食・税・サービス料込みでシングル、ダブルとも 80 US ドルです、スイートルームは 120 US ドルの特別料金で 10 室用意できます。Maksoud は 5 つ星のホテルで、サンパウロで最高級のホテルの一つです。約 3 ブロック離れたところの 3 星のホテルにシングルで 25 US ドル、ダブルで 30 US ドルのいくつかの部屋が押さえてあります。

旅行

○会議開催中のツアー

会議中のツアーは the Instituto de Pesquisas Technologicas (サンパウロ州立技術研究所) になるでしょう。

○会議後のツアー

会議後のツアーとしてつぎの計画が予定されています。

A: 南西方向研修旅行

サンパウロからバスによる旅行、このツアーは 2、3 の単板工場と木材保存工場に立ち寄る予定。ハイライトはイグアスの滝になるでしょう。3ヶ所の巨大な滝が連なった全長 2.6 マイルの滝—急流が落ちる本物のカーテン。このツアーの所要時間は 5 日の予定。

B: 北東方向研修旅行

サンパウロから航空機で旅行、このツアーには Vitoria の北方にある Aracruz Pulp 会社の見学が含まれる予定。ユーカリの植林(ここでは毎日約 10 万の苗木が無性繁殖によって作られている)を見るでしょう。ブラジルの首都であるブラジリアでは国立林業試験場へのツアーが組まれています。もう一つの見学先はジャングルの最も密集した地域に作られて無秩序に広がった人口百万近くの町マナウスです。ここでは国立林産研究センターとことによるとその地の森林作業を見学します。この旅行は 5 日から 6 日かかる予定です。

会議参加登録料

一般参加 一人 \$ 225 (1988 年 1 月 1 日以前)

一般参加 一人 \$ 250 (1988 年 1 月 1 日以降)

学 生 一人 \$ 100

同伴者・来賓 一人 \$ 100

参加登録料は全分科会から集めたプロシーディングスや要約のコピー、会議場への往復地上輸送、会議中のツアー、コーヒープレーク、開会式および閉会式、懇親会の費用を含む。

参加登録の締め切りは1988年5月15日

その他

会議の公用語は英語ですが、少なくとも全体会議中はスペイン語とポルトガル語にも同時通訳されます。ブラジルは人口1億3千5百万人の大きな国です。通貨はクルゼードで、言葉はポルトガル語です。

問い合わせ先

Mr. J. Luther Utt

Unique Rewards (会議と旅行の計画
担当会社)

P.O. Box 21385

Roanoke, VA 24018 USA

(703) 774-2900, (800) 888-0028

Telex 495-6181 UNIQUE

(京都大学・野口昌巳、抄訳・服部順昭)

IUFRO/S 6.05 (リモートセンシング) と国際写真測量学会 (ISPRS)

第7部会 (応用) との共同セッションの開催について

前号でもお知らせしましたように S 6.05 (部会長 Dr. Zsilinszky (カナダ)) は、国際写真測量学会の第16回大会が昭和63年7月1日~7月10日に京都国際会議場で開催される機会を利用し、その第7部会との共同集會を大会期間中に計画しています。現在は関係機関および個人に対して、発表論文の募集を行っている (昭和63年1月31日締切り) 最中です。

この共同集會のテーマとして次の4つの課題を設定しました。

(a) 資源情報のための最新センサ (光学的またはレーザー) からのデータの評価。

(b) リモートセンシングと地理情報システムとの組合せ利用。

(c) 森林解析のための高分解能衛星データの評価。

(d) リモートセンシングの短期・長期の研究・教育需要。

この共同集會に対しては、他の第7部会の発表と重複しないように90分のセッションを全部で5つ計画しています。各セッションでは招待論文1編、発表論文4編の合計5編の論文発表が行われる予定です。前記した4つのテーマ毎に1つのセッションを割当て、残りの1つのセッションは、その他を割当てようと計画しています。また、都合がつけば、この共同集會だけの論文集の発行も計画したいと考えています。

アジアではじめて開催される ISPRS 大会です。共同集會の成功のため関係各位の御協力、御支援をお願いします。尚詳細については、筆者に御連絡下さい。

(国立林試・大貫仁人)

第5回国際植物病理学会議・第10部会：樹病

Fifth International Congress of Plant Pathology

Section X: Forest Pathology

開催地：京都国際会議場

開催期間：1988年8月20日~27日

参加費：4万円 (1988年4月末まで)、以後4万8千円

学生会費 1万8千円

Section Coordinator (部会長)：小林享夫 (林試)

Sub-coordinator (副部会長)：真宮靖治 (林試)

Sub-committee (部会組織委員)：横田俊一 (日本)。

J.N.G.: bbs (英国), 平塚保之 (カナダ), G.A. Kile

(濠州), 羅 啓俊 (韓国), A. Ofosu-Asiedu (ガーナ)

Session X-1: Pine wilt disease caused by pine

wood nematode (マツ材線虫病) — Section IV 線虫学と共催

Convener/Chairperson (議長兼座長)：R.F. Myers (米国)

Co-convener (副議長)：真宮靖治 (林試)

Session X-2: Tree diseases in the tropics (熱帯の樹病) — Section XI 熱帯作物の病害と共催

Convener/Chairperson：A. Ofosu-Asiedu (ガーナ)

Co-convener：小林享夫 (林試)

Session X-3: Recent advances in tree rusts (樹木のさび病)

Convener/Chairperson : E.G. Kuhlman (米国)

Co-convener : 佐保春芳 (林試)

Session X-4: Canker and shoot blight of conifers
(針葉樹の胴・枝枯病)

Convener/Chairperson : B.R. Stephan (西独)

Co-convener : 田中 潔 (林試北海道支場)

Session X-5: Canker and dieback of broad-leaved
trees (広葉樹の胴・枝枯病)

Convener/Chairperson : J.N. G : bbs (英国)

Co-convener : 周藤靖雄 (島根林試)

Session X-6: Biology of tree and wood decay
(材質腐朽病)

Convener/Chairperson : R.A. Blanchette (米国)

Co-convener : 阿部恭久 (林試)

Session X-7: Response of tree to infection (病原
体の侵入・感染に対する樹木の反応)

Convener/Chairperson : 平塚保之 (カナダ)

Co-convener : 鈴木和夫 (東大)

Session X-8: Insect-pathogen relationships in
tree diseases (樹病における昆虫と病原体の共生関係)

Convener/Chairperson : M.J. Wingfield (南ア)

Co-convener : 小林享夫 (林試)

ほかに Poster Session (展示発表) あり。

表記のように昭和 63 年 8 月に京都において第 5 回国際植物病理学会議 (ICPP-5) が開催されます。これは国際植物病理学会 (International Society of Plant Pathology-ISPP) の議決により日本で持たれることになったもので、国内的には ICPP-5 組織委員会 (委員長、與良清東大名誉教授) が組織され、大会開催に向け、鋭意努力中です。

ICPP-5 では「21 世紀の人類繁栄への植物病理学の

貢献」(Contributions of plant pathology for prosperous human Life in 21st Century) という大会スローガンのもとに、4つのシンポジウム (イネの病害、植物保護におけるバイオテクノロジー、植物病害の生物的防除、殺菌剤研究の最近の進歩) と 16 の部会講演発表 (ウイルス学、細菌学、菌学、線虫学、土壌病害と病原菌、感染生理学、抵抗性と病原性の遺伝、疫学と被害評価、病害防除、樹病学、熱帯作物の病害、植物病理学の教育と普及、種子伝染病害、市場～貯蔵病害、大気汚染の植物への影響、菌産生毒素) およびポスターセッション (展示発表) を行うことになっています。

各部会は 3～8 の半日単位の Session から構成され、コンビナー、副コンビナーによる招待講演プログラムを作成中です。

第 X 部会である樹病セッションは上記のように 8 つの Session を受持ち、上部機関である ISPP の樹病委員 (IUFRO Division 2 の樹病 WG リーダー) も加わった、部会組織委員の意見を汲み入れて、Session の主題と議長が決められ、順調に各 Session のプログラム (6～8 名の招待講演者と演題) が作成されつつある。主催国の日本からは各 Session 1～2 名の招待講演者が選ばれる予定になっています。

他の部会にも樹病と関連する Session がかなりあり、ポスターセッションは参加自由ですから、できるだけ多数の国内参加を希望します。

なお、セカンドサーキュラー (大会参加申込書、発表要旨用紙入り) をご希望の方は下記へお申込み下さい。

〒107 東京都港区赤坂 8-5-32 赤坂山勝ビル

KK インターグループ内

第 5 回国際植物病理学会議事務局

(国立林試・小林享夫)

昭和 62 年度の IUFRO-J 会費の納入について

御案内が遅れましたが、昭和 62 年度会費未納の機関は、従来通り下記へご納入下さるようお願いいたします。

納入先: IUFRO-J 事務局

農林水産省林業試験場、調査部内

○ 郵便局振込の場合

郵便振替口座 東京 9-159224

(名義) IUFRO-J 事務局

○ 関東銀行牛久支店

普通預金 No. 697583

(名義) ユフロ事務局

IUFRO-J NEWS No. 32
 昭和62年12月15日
 編集・発行：国際林業研究機関連合
 日本委員会事務局

..... M E M O

===== IUFRO-J NEWS No. 32 =====